

4-11				
主題	褥瘡予防・誤嚥性肺炎予防につながるギャジアップ 15 度設定の取り組み			
副題	「実際に効果がある」と伝えられるとケアの徹底につながる			
キーワード 1	褥瘡予防	キーワード 2	誤嚥性肺炎予防	研究(実践)期間 18 カ月

法人名・事業所名	社福) 養和会 特別養護老人ホーム第二八丈老人ホーム			
発表者(職種)	田島大和(介護職員)、伊勢崎嘉則(機能訓練指導員)			
共同研究(実践)者	笹本綾子(介護主任)、山下賢治(介護副主任)、金川祐介(介護職員)、その他			

電 話	04996-2-0770	F A X	04996-2-0432
-----	--------------	-------	--------------

事業所紹介	八丈町は東京の南方海上 291 km に位置し、交通の便も良く、海洋性気候により、生活がしやすい島である。人口は 7500 人程度で、島内の高齢化率は 38.6% と高い。当施設は離島という環境下で新たな知識を得にくい中、島内の住民に向けての勉強会等を開催し、介護の知識・技術向上を目指している。
-------	--

### 《1. 研究(実践)前の状況と課題》

第二八丈老人ホーム(以下当施設)では、以前より褥瘡予防のアプローチについて積極的に取り組んでおり、約 8 年前に比べると、Stage I から II 程度で発見し、早期に改善できる体制となってきた。しかし、月日が経ち、新人の職員などに褥瘡対策の方法について伝える際、褥瘡が実際に良くなる過程を経験していない場合、本当にその方法が有効なのかと疑問視され、実際の実行に至らないケースもあった。

また、当施設では誤嚥性肺炎予防として以前から口腔ケアなどに力をいれていたが、それでも誤嚥性肺炎で入院する利用者も数名おり、誤嚥性肺炎対策も重要な課題であった。

### 《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

今回はある研修会で学んだ逆流性食道炎(誤嚥性肺炎)予防のためのベッド上ギャジアップ 15 度設定(以下 15 度設定)が褥瘡予防にもつながると考え、以下の 3 段階で仮説を設定し当研究に取り組んだ。

- 仮説 A: それまで褥瘡が生じたことが無かった利用者 a 様に STAGE II の褥瘡が生じた。その利用者の生活状況等考慮した上での褥瘡改善計画実施にあたり、研究デザインを調整することで、15 度設定が褥瘡改善・予防に有効であるかを検証した。
- 仮説 B: 次のケース、嘔吐予防のために食後 30 分程度チルト式車いすにて離床していた利用者 b 様は、1 か月程度の期間、褥瘡が完治しなかった。そこで、チルト式車いすでの離床ではなく、ベッド上 15 度設定に切り替えることにより、嘔吐が発生することなく、褥瘡が改善できるかについて検証した。
- 仮説 C: A・B の客観的なデータを基に、褥瘡予防および誤嚥性肺炎予防における 15 度設定の有効性を職員に伝え、誤嚥性肺炎にて入院に至る利用者が減少することを期待して、館内利用者に対する 15 度設定の実施を行った。(新人職員などに、なぜそのケアを行うのかを理解・納得してもらった上で、実施・徹底することも目的とした)。

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

仮説A：初めて尾骨部に褥瘡ができた利用者a様に対して、褥瘡に影響を与える要因として重要な、パッドの交換回数（湿潤）や食事摂取状況（栄養）に変化しないことを確認した上で、ベッド上のポジショニングとして15度設定のみを以前と変更、徹底し、経過を観察した。（医務の処置はコーパスタであった）

仮説B：利用者b様は1か月間褥瘡が改善せず、その主原因としてはチルト式車いすでの離床時間が長いことが影響していると考えられた。仮説Aでの結果をふまえ職員に伝え、食後はベッド上15度設定に変更し、褥瘡および嘔吐の状態について経過を観察した。

仮説C：館内介護職員に対し、仮説A・Bでの検証結果・データを基に、館内の職員会議や書面等で15度設定の有効性について伝えた。これらを通して各職員に理解・納得して頂いた上で、館内利用者に対しての15度設定を実施した。

### 《4. 取り組みの結果》

3つの仮説に対する研究結果は、

- ・A：15度設定における尾骨部の褥瘡改善について、初めて褥瘡ができた症例が、2週間程度で完治し、その後も褥瘡の発生がなかった。（完治し、医務による処置が終了した後も褥瘡の再発生はなかった）。
- ・B：嘔吐予防のために食後30分程度離床していた症例に対して、チルト式車いすでの離床ではなく、ベッド上15度設定に切り替えたところ、嘔吐もなく、褥瘡も2週間程度で完治し、その後も同様な褥瘡の発生はなかった。
- ・C：館内利用者に対して15度設定を実施したところ、過去に誤嚥性肺炎の診断で病院に入院した利用者2名を含めた利用者全体で、5カ月の期間において誤嚥性肺炎で入院した利用者は0名であった。

### 《5. 考察、まとめ》

仮説A、Bの2症例の取り組みの結果から、褥瘡予防に関する15度設定は有効な手段であると示された（仮説Aに関して、初期の2週間での改善の際には医務による処置の影響もあると考えられるが、完治後、医務による処置が終了した後も再発生がないことから15度設定が有効であると考えられた）。

誤嚥性肺炎予防に関しては、食事の際の誤嚥や口腔ケア、全身状態など様々な影響要因があり、15度設定のみで完全に予防できるというものではないが、15度設定も1つの効果的な手段と考えられた。

また、今回の15度設定といった「ケアの実施・徹底」にはそれぞれの職員の理解と納得が必要と思われる。そのためには、そのケアによって実際に効果が出るのか等を、わかりやすい形で明確に提示していくことが重要と考えられた。

### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。加えて発表データは個人が特定できないようにデータ処理を行った。

### 《7. 参考文献》

- ・「動画でわかる 褥瘡予防のためのポジショニング」（2009）. 田中マキ子. 中山書店.
- ・「リハスタッフのためのポジショニング」太田清人. 合同会社 gene 主催研修会資料.

### 《8. 提案と発信》

今回の当研究は、15度設定の褥瘡・誤嚥性肺炎予防の効果というテーマと共に、働いている職員に理解・納得してもらえるデータの収集と提示も大きなテーマであった。これについて、目的・仮説について焦点を絞って取り組む「研究」という活動が有益であることが経験できた。

よりエビデンスの高い研究方法として他施設と協力しての研究などもあると思われるが、当アクティブ福祉 in 東京のような場を通して、様々な施設の方々と連携を模索できればと考える。